

小児救急シリーズ①

小児の発熱

監修 柏市立柏病院 小児科医師
鈴木 正敏



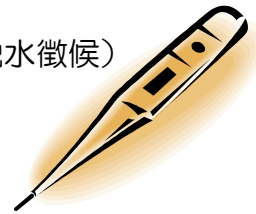
季節の変わり目や寒くなってくると、小さいお子さんは突然発熱したり、具合が悪くなることが多くなると思います。今までにお子さんの突然の発熱で困った事はありませんか？ 突然の発熱にも慌てないように、今回は発熱が起きたときの対処法について、当院の小児科 鈴木 正敏 医師に話を聞きました。

小児の発熱とは

- 小児の発熱の多くが**感染症によるもの**です。（なお、特に夏期には「熱中症」による発熱も見られます。）
- 小児は様々な感染を繰り返しながら、次第に抵抗力を強めて行きます。したがって発熱が頻回に繰り返されるのは珍しいことではありません。
- 緊急性があるもの（**重症感染症**）はこれらのごく一部ですが、次に示す項目に該当するようでしたら、救急対応が必要となります。

発熱があり、救急対応が必要な状態とは（お熱が出た時のチェックポイント）

- 高熱（40℃以上）が続く。
- 意識がもうろうとしている。
- 尿量が少ない、尿の色が濃い、皮膚や唇が乾燥している。（脱水徴候）
- 水分補給ができない。
- ひどい痛み（頭痛、腹痛、耳痛など）を伴う。
- 生後3カ月未満で、38℃以上の発熱をしている。



上記のような症状があるときは、出来るだけ早めに医療機関へ受診しましょう。

発熱の原因

発熱の原因として、次のような疾患が挙げられます。

- 1 気道（呼吸器）感染症
 - ① 感冒（カゼ）
 - ② 咽頭・扁桃炎
 - ③ 急性気管支炎
 - ④ 急性細気管支炎（RSウイルス感染症）
 - ⑤ 肺炎
 - ⑥ 急性副鼻腔炎
 - ⑦ 急性中耳炎など
- 2 消化器感染症
- 3 尿路感染症（→膀胱炎、腎盂腎炎）
- 4 敗血症、化膿性髄膜炎



- 5 脳炎、脳症
- 6 その他の感染症（→突発性発疹症、麻疹、流行性耳下腺炎、水痘、ヘルペスウイルス感染症など）
- 7 川崎病
- 8 リウマチ性疾患
- 9 悪性腫瘍
- 10 熱中症など環境因子が関与するもの、その他



お熱が出た時はどうすればいいの？

- あまり厚着はさせず、熱が放散しやすい、楽な服装にしましょう。
- 本人が寒がる時（熱が上がる時）には、嚴重な観察のもとであれば、一時的に暖めてあげてもよいでしょう。但し、熱が上がりきったらすぐに中止してください。
- クーリングをしましょう。腋窩や鼠径部など血管が多く通っているところを濡れタオルや保冷剤をタオルに包んで冷やすのが効果的です。但し、本人が嫌がれば無理に行う必要はありません。



解熱剤の使用について

- 解熱剤は病気を治すものではありません。
- 発熱は、本来侵入してきた病原体に対抗し、身体の側が反応して出現しています。それ自体が身体に悪い訳ではありません。
- 但し、発熱により（特に熱が上がるときに）不快感が強かったり、体力を消耗することもあり、解熱剤を使っていけないことはありません。
- 逆に、『40℃以上の発熱だからといって使わなければならない』ということもありません。（熱が上がりきってしまうと、結構元気になる児も多い。）
- またせっかく眠っている児を起こしてまで、使用する意味もありません。



これらのことを踏まえた上で、解熱剤を使用する目安は・・・

『発熱が 38.5℃以上で、本人の具合が悪そうであれば、6 時間以上間隔を開けて、1 日 2～3 回は使用して構いません。』

しかし、あくまでも『本人の状態や気分を楽にさせ、体力の温存を図ること。』が解熱剤使用の目的であることを忘れないでください。

**小児科の診療時間・医師担当表は、当ホームページでご確認できます。
そちらをご覧ください。**

